ブロードウェイを創りたい 大好き男がめざす夢

リレー対談

歌舞伎がやりたくて入った松竹
もぎりを続けたからこそ自ら気づけたお客様の変化
歌舞伎の低迷時代の救世主はあの藤山寛美
新橋演舞場の支配人を経て
日本国内、海外へ歌舞伎を持ってゆき
新しい歌舞伎座の建替え責任者を命じられ

武中雅人 氏

松竹（株）専務取締役／松竹衣裳（株）代表取締役会長

1957年東京生まれ。学習院大学文学部史学科在学中より「演じて知ろう歌舞伎の美」をモットーとする国劇部（歌舞伎研究会）で活躍。1980年松竹（株）入社、1997年新橋演舞場支配人、2007年取締役就任、歌舞伎座開発準備室長、2012年常務取締役、歌舞伎座開発推進室。平成中村座、こんぴら歌舞伎大芝居、パリオペラ座公演など担当、その知見を生かし第5期歌舞伎座建て替えのプロジェクトリーダーを務める。歌舞伎座タワー12000坪のテナントリーシング活動で満床へ牽引。「ニコニコ超歌舞伎」のスーパーバイザー、歌舞伎界初のオフィシャルオリジナルキャラクター「かぶきにゃんたろう」を開発。2015年松竹衣裳（株）代表取締役会長就任。2016年松竹（株）専務取締役就任、現在に至る。

劇場中心の街づくり　独自の仕事も歌舞伎・趣味もまた歌舞伎

役者もお客も従業員も三方よしの劇場を
あわてずに待ての「風来花自笑」に救われる
黄金時代を引き寄せる若手の力を結集し
日本の伝統芸能　歌舞伎よ世界へ羽ばたけ
文化と建築を繋げればブロードウェイが見えてくる
価値ある衣裳の保存が伝統文化継承の一貫に

大沼　淳 氏

文化学園理事長

1928年長野県生まれ。海軍兵学校修了、人事院勤務の後、1957年文化学園常任理事、1960年同理事長就任。文部省大学設置審議会委員、同私立大学審議会委員、臨時教育審議会委員、全国専修学校各種学校総連合会会長などを歴任。2000年より日本私立大学協会会長（5期目）、他に一般財団法人日本ファッション教育振興協会理事長、ファッションビジネス学会会長。藍綬褒章（1984年）、功績勲章勲二等（2002年、ルーマニア政府）、勲二等瑞寶章（2003年）、飯山市名誉市民章（2004年）、渋谷区名誉区民章（2009年）受章。

武中氏の学生時代から長年続く交流

大沼　今日は松竹ずっと歌舞伎に携わってこられた武中雅人さんにお越し頂きました。現在は松竹の専務取締役で、松竹衣裳の代表取締役会長も務めておられ、非常に明確な目標をお持ちの方です。今日は歌舞伎のこと、日本の芸能の衣装のことなど、いろいろお話しできたらと思っています。

武中　よろしくお願いします。

大沼　実は武中さんのお父さんが私の海軍兵学校時代の先輩というご縁で、しかも、教育関係の全私連の役員になって、中高とも関係ができた時に、お父さんが成徳学園高校の理事長だったというご縁です。

武中　現在は、下北沢成徳高校と名前が変わりましたが、まだやっています。

大沼　その頃武中さんは学習院に行っておられたんですね。それで「何のために学習院に行ったのか?」と訊いたら「歌舞伎をやるため」と言うんですよ。

武中　まだ20歳になる前ぐらいでしたでしょうか。

大沼　本気なのかと思っていたら、学習院では歌舞伎が盛んに行なわれていたようですね。そのためにまず学習院に入って、その後、松竹に行きたい、松竹以外はどこも興味がないという話を聞いて、信念がはっきりしていて、「大したものだ」と思いましたよ。勝手に永山武臣さんに話をしてね、武中さんが松竹へ入ったら、メキメキと頭角を現して専務にもなるし、舞台衣装の松竹衣裳の社長にはなるし……。

武中　いえ、会長でございます（笑）。本当にお世に話になりました。面接の最後、大谷隆三は出てきませんでしたが、永山、奥山両巨頭が副社長の時代です。永山に「歌舞伎が好きだと聞いているが、最近一番気になった事件は何だ」と訊かれて、「水谷八重子さんが亡くなられたことです」と言いましたら、「そうか」と言って頷いていたのですが、奥山が横から「松竹だからと言って、歌舞伎ばっかり観てればいいってもんじゃないんだぞ」と言われました。そこで永山会長が「いいんだ」と言ってそれで決まりました。ところで大沼さんは、父とは兵学校で2年違いですよね?

大沼　2年違うと、大将と一兵卒ぐらい違うんです。武中さんのお父さんは大正14年生まれで、とても優秀な方でした。私は運動が嫌いでね。

武中　勉強はお好きなんですね?

大沼　好きではないんですが、小学校も中学校でも優等生でした。でも体育は駄目で、教練で「落第点」をもらっているので、軍の学校に行くなんて夢にも考えていませんでしたね。私の通っていた中学からも60人ぐらい受けて、私一人が海軍兵学校も陸軍士官学校も両方受かったのです。

武中　大沼さんのご出身は長野ですよね?

大沼　長野県の田舎町です。それで広島県の江田島に行って、初めて大きな世界を知るんですね。日本中から秀才が集まって猛烈に厳しいエリート教育でした。でもエリート教育と言うのは、人間に屈辱感を与えることを絶対にしないんです。ある時、たまたま手を後ろに組んでいたところを見られて「手を後ろに組むというのは疲れた証拠であり、将来人の上に立つ人間が少しくらいのことで疲れていたら、部下はどうなるんだ。どんなに疲れていてもそんな態度を取るな」と言って、パンパンと頬を殴られて目から火花が散りましたよ。

武中　「お前は駄目な奴だ」と言って殴るんじゃないんですね。

大沼　一番大切なことは自立精神です。私が入った時の第一〇九分隊の3年生の首

席で、伍長が青木和男さんという方でしたが、その青木さんと後に再会しましてね。私が日本私立大学協会の会長として九州で開催された全国総会で挨拶をしたところ、福岡工業大学の学長として出席されていた青木さんが、「江田島にいた大沼さんか」と声をかけて来られました。

武中 すぐに分かりましたか?

大沼 ええ、兵学校時代のままで……。青木さんは私にとって、とても大きな影響を受けた人で、総て一級の万能な人が世の中にいるんだと、初めて知りました。

切符のもぎりから新しい歌舞伎座の建て替え担当に

大沼 選択の余地のない時代でしたから、私の人生は総て不得意な方向に行くんです。その苦手なことを克服しながら、また嫌いな方向へ行って、最後は、ファッションなんて全然分からない所の理事長になってしまって。得意なことをやらせてもらったことは一度もない、と言ってもいいでしょうね。

武中 ご自身の希望ではなく、運命的に苦手なところに飛び込んでこられたんですね。現代の若者はその選択肢があり過ぎるのでしょうが、「不得意だからといって逃げては駄目だ、与えられたことをしっかりやらなければ」と言いたいですね。

大沼 選択の余地がなかったこともありますが、行った先で全力を尽くす。そうすると何とかなるということが、ようやく分かるんです。それでうまくいったら運がいい、まずかったら運がなかったと思えばいいんです。

武中 努力の問題ではなく、運ですか。

大沼 努力が足りないのは論外で、最大限の努力をしてもうまくいくとは限りませんよ。武中さんは歌舞伎が好きで松竹に入って最初の仕事は何でしたか?

武中 初仕事は歌舞伎座の「もぎり」です。永山から「お前は、3年間、ともかく黙って切符を切ってろ」と言われまして、仕事が別にある時でも、必ずお昼の開場時と夜の開場時には切符を切ることを心がけていました。

大沼 お客様のことをしっかり勉強しなさい、というアドバイスはなかったんですか。

武中 具体的に何をしろ、という指示はありませんでした。自分で「気づけ」ということだったと思いますね。そして2、3年して、たまさか同じお客様に何度も出会うことがよくあって、その時、お見えになった時とお帰りになる時では、お顔が違うことにようやく気づくようになりました。「これが歌舞伎の素晴らしさなんだ」ということを教えたかったのではないかと思いました。後から聞いた話によると、ひょっとしたら、これは永山が五島昇さんに言われたことだったのかもしれません。

大沼 ともかく体感しろ、ということですね。

武中 それが私の最初の仕事でした。それから宣伝だとか歌舞伎座の建て替えですとか、いろいろとやらせて頂いています。来年の正月には松本幸四郎、市川染五郎、松本金太郎が親子三代同時襲名の興行を行ないます。前回、昭和56（1981）年の10月、11月に、初代松本白鸚（はくおう）、九代目松本幸四郎、七代目市川染五郎の親子三代同時襲名から宣伝をさせて頂いて、歌舞伎役者の方々の近くにいて、いろいろとご面倒を見たり、宣伝をしたり、はたまた問題が起これば、その対応をしたり守ったりと、まあさまざまなことをして来ました。

大沼 歌舞伎の黄金期というのはいつですか?

武中 間違いなく今だと言えます。観客数も確実に伸びています。そしてこれを今後にどうつなげていくのかというのが課題の

ひとつですね。江戸時代から大正時代にかけては、確かに「大芝居」、「小芝居」というのがあって、大芝居に出ている俳優さんがトップでしたが、小芝居で座頭を張っていた人も、時々は大芝居に出て来て脇の役を務めたりしていたようです。その時代、庶民の芸能は歌舞伎だけでしたから、それなりに隆盛ではありました。しかし歌舞伎にも冬の時代はありまして、私が入社した頃がそうだったと思います。あの頃は、中村歌右衛門丈、松本白鸚丈、中村勘三郎丈、尾上梅幸丈、尾上松緑丈、片岡仁左衛門丈、そして中村鴈治郎丈ですね、今の坂田藤十郎さんのお父様、それから實川延若丈、市村羽左衛門丈という方々が、綺羅星のごとく出て来られたのですが、やっぱり「歌舞伎は難しい」と言われて敬遠されていました。確か昭和50年代です。その時、助けて頂いたのが、藤山寛美さんだったのです。道頓堀の中座を中心に松竹新喜劇が隆盛でしたので、そこで松竹の演劇は大いに助けて頂きました。当時歌舞伎は黒字になったり赤字になったりを繰り返しておりましたが、12カ月の中で6月は萬屋錦之介特別公演、8月は三波春夫特別公演、12月は大川橋蔵特別公演と、3カ月を映画スターや歌手の方々に助けて頂いて、ようやく残りの9カ月で4勝5敗か5勝4敗という成績でしたね。永山はその時代をじっと耐え忍んで過ごしておりましたので、とても辛かっただろうと思います。昭和60（1985）年に、成田屋、市川團十郎が十二代目を襲名して、その時初めて歌舞伎座の木戸銭として1万円を頂きました。この「1万円でいけるか」と勝負を賭けたのが永山で、4月、5月、6月と3カ月の連続興行をやりました。それが何と総て大入りになって、空前の歌舞伎ブームが到来したのです。私はそれをずっと歌舞伎座という劇場で直に体感していました。永山が「面白い奴だ」と言ってくれて、何度か秘書室に来るようにと言われたのですが、やっぱり「歌舞伎座でお客さんの顔を見させて下さい」とお願いし続けました。会長が最初に仰ったのが〝もぎりをしていろ〟ということでしたので、もぎりをずっと続けて、約15年間歌舞伎座におりました。

大沼　それから新橋演舞場の支配人を暫くやって、その後全国に歌舞伎公演を営業しましたね。

武中　10年前、突然、今の迫本が社長になったのと同時ぐらいの時に、なぜか「武中、歌舞伎座の建て替えの責任者をやれ」と言われたんです。私は歌舞伎座に行って、新橋演舞場に行って、そして全国に歌舞伎を売り歩いておりました。北は北海道の津別から南は沖縄の那覇まで、全国巡業という旅公演のセールスとツアーコンダクターをやっていました。そして最後に團十郎丈のパリのオペラ座ガルニエの公演までやらせて頂いて、全国の劇場、全世界の主だった劇場を殆ど見て来ましたので、その意味では器を「見る目」もつけてくれたと思っています。それが10年前になります。ですから私の今の名刺には、「不動産部門担当」という肩書が入っているんですよ。

大沼　建築家の隈研吾さんと侃侃諤諤やったんですか。

武中　やりましたよ。隈さんを推薦したのは私ですし、灯りは照明デザイナーの石井幹子さん、石井リーサ明理さん親子にお願いしました。

大沼　そうでしたか。

武中　隈さんには沢山の歌舞伎役者を紹介して、会って頂いて親しく話をしたりすることによって、本当に使いやすい劇場を目指しました。役者が使いやすく、お客様は見やすく、従業員も仕事をしやすい

ても楽しみと語るお二人

これからの歌舞伎がと

という三方よしの劇場を造ろう、という話をずっとして来ました。隈さんは劇場というのを設計したのが、実は初めてなんだそうです。私は海外公演の経験もあって各劇場を見知っていますので、彼を世界のいろんな劇場に連れて行きました。ロンドンのウェストエンドの劇場も総て彼に見せました。パリのオペラ座ガルニエにも連れて行って、ガルニエの芸術監督も紹介しました。いろいろと構想を練って、今仰ったとおり、色合いからその他様々なことを侃侃諤諤でやらせて頂きました。

文化の変遷として歌舞伎の衣装を残す

大沼 永山さんは文化功労者など、さまざまな褒章を受章されていますが、普及事業で文化功労というのは珍しいですよ。多分永山さんが最初で最後でしょう。

武中 文化功労者は確か1996年に受賞されていると思います。

大沼 武中さんが演舞場の支配人になって、私もいろいろ教えてもらったり、観に行ったりしてファンになって行きました。團十郎さんご夫妻も紹介して頂いたり、大阪公演の時に「大阪の大学を紹介してほしい」という話に応じたり、多少お手伝いをした覚えがあります。

武中 理事長には毎年お正月に必ず観劇会を催して頂いて、本当に有難いことです。

大沼 これからも楽しみにしています。團十郎さんも中村勘三郎さんも早世してしまったけれど、歌舞伎を担う新しい力となる、海老蔵、勘九郎、七之助、染五郎、猿之助、松也、獅童、愛之助あたりがどんどん育っていますね。

武中 とても楽しみで期待の持てる新しい黄金時代になると思いますね。

大沼 次代を担う歌舞伎役者が大勢いる中でも、リーダーとなる人が必要です。本気でリーダーの自覚を持ったら、またひとつ大きくなるんじゃないでしょうか。海老蔵も親父の團十郎の目のいいところと、奥さんの器量のよいところを受け継いでいますね。

武中 そうですね。海老蔵丈のお母さんは学習院で私の2年上です。学習院には「国劇部」という歌舞伎研究会がありまして、そこの出身なんですよ。

大沼 そうですか、本当に素敵な方ですね。この空前の歌舞伎人気の流れを定着させるためには、運営をしっかりして、お客が来るような舞台をやらないとね。

武中 本当に仰るとおりです。しっかり肝に銘じて頑張ります。

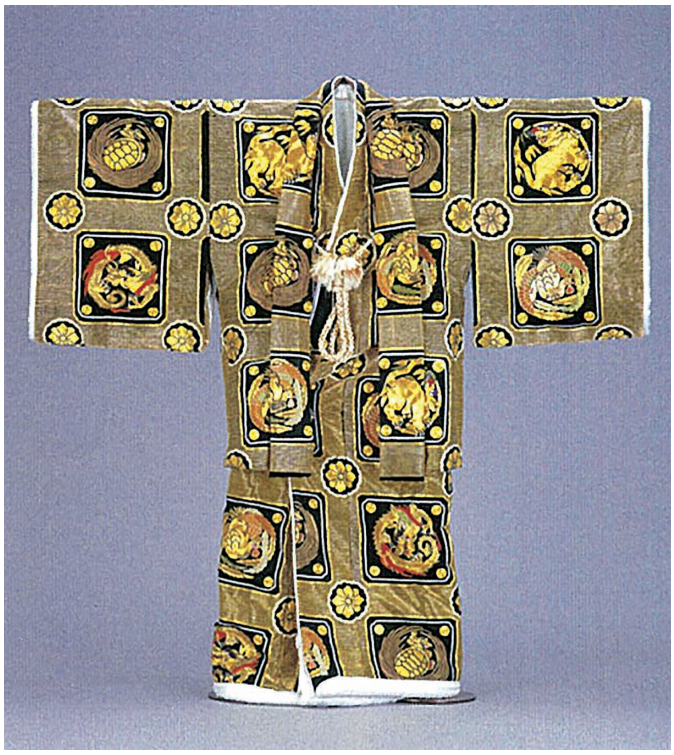
大沼 この「文化学園服飾博物館」には日本のいろんな衣装が展示されています。井伊直弼のものが約150点あります。これは江戸時代の最高の装束です。室町の能衣装もありますが、歌舞伎の衣装が1点もありません。それは松竹で持っていればいいと思います。

武中 価値ある衣裳をきちんと保存していくには、施設は勿論のこと、相当な技術と愛情が必要ですね?

大沼 そうですね、温度や湿度は365日24時間体制で管理しています。能装束は当館の自慢の品です。歌舞伎の衣装は能装束より立派だけど、当館にはないんですね。それを収集したいと思っていたら、武中さんが松竹衣裳の会長だと言うのでいろいろ聞いてみると、歌舞伎の衣装に関わっているのは実は文化学園の卒業生なんですね。

武中 さようでございます（笑）ご存じなかったですか?最近文化学園の卒業生の就職が増えました。

大沼 能衣装はもう「死んだ文化財」のようになっていますが、歌舞伎は現役で動いていますから、博物館に入る衣装がないんですね。



髭の意休

武中　能の場合は年間で公演されるのが数回で、必ず1回公演ですから、衣装もそれ程傷むことはありません。ですから先ほど仰ったように、250年前のものでもちゃんと残っているわけです。その点歌舞伎の衣装というのは、25日間興行致しますので傷みます。ですから古い衣装は残っていないんです。結局、4回か5回の興行で100日ぐらい着ますとね、やっぱり新しいものを作らなければならなくなります。それもできるだけ同じようなものを、ということで京都の西陣に発注するんですが、その作り手が少しずつ減少してきています。最近、理事長ともお話しさせて頂いていますが、和裁のできる人がいなくなってきて、伝統工芸をやる方が本当に少なくなってきています。

そういったものを残していかないと、伝統芸能である歌舞伎も滅びていく可能性がある、と危惧しています。衣装をつけない歌舞伎なんてありませんからね。

大沼　それを何とか一緒に取り組んでいこうじゃないかと、お願いしているところです。日本の服飾の中でも能衣装は凄いと思っていますが、歌舞伎の衣装は織も染も凄いですね。歌舞伎の衣装の変遷というのをきちんと残さないといけませんね。

武中　本当に仰るとおりですね。

大沼　そこに財界を取り込んでいけたらいいですね、歌舞伎座の舞台緞帳も出しておられる永谷園の永谷さんとかね。

武中　理事長には緞帳のお披露目公演にも来て頂きました。亡くなられた永谷嘉男さんにアドバイスされておられましたね。初めて歌舞伎座に緞帳が入った時、私は入社2年目ぐらいの時でしたが歌舞伎座におりました。「永谷園が初めて緞帳を出す」と言われた頃はまだ「永谷園」という名前も今ほどではありませんでしたが、永谷嘉男さんは「歌舞伎座に緞帳を出すことが夢だった。だからお茶漬け海苔のパッケージも定式幕をモチーフにしているんです」とはっきり仰っておられました。そして「この緞帳開きの式典を一番喜んでいるのは、うちの母です」と、その日2階の桟敷席に招待しておられたお母様に「スポットだけ当ててやってほしい」と頼まれまして、それで、ピンスポットをポーンと当てたら、とても嬉しそうに立ち上がって手を振っておられたお母様の姿を、今でも鮮明に覚えています。

世界に訴求できる文化を未来へとつなげていく

武中　文化学園の始まりは裁縫学校でしたよね。当時は女子だけだったと思いますが、男子を受け入れるようになったのはいつ頃からですか?

大沼　昭和32年4月に初の男子学生が23名、文化服装学院に入学しました。現在は3割ぐらいが男子で、高田賢三、山本耀司、田山淳朗、丸山敬太など、多くの卒業生が活躍しています。日本人は感性が非常に豊かなんですね。これからの日本の成長産業の一つがファッションで、外国からの注目度の高い歌舞伎はもっと発展して行く芸能だと思います。

武中　日本に興味を持っている外国人は、本当によく日本の文化を勉強していますね。

大沼　フランス人の美術史家、ソフィー・リチャードさんの『フランス人がときめいた日本の美術館』という本で、文化学園服飾博物館を紹介して下さいました。東京のトップに掲載されており、「日本のファッションを見たいなら一番のおすすめ」と書かれています。

武中　そうですか。

大沼　歌舞伎がよくなっていくにはいい歌舞伎役者が必要です。しかし役者だけでは

なく、音楽家、衣装や大道具、小道具、何よりも全体をマネージメントしてくれるシステムがないとね。そのシステムを松竹は築き上げたと言っていいでしょうね。歌舞伎も世界中を歩いていますが、何か国で公演をされましたか?

武中 そうですね、中国、フランス、イギリス、イタリア、ドイツ、アメリカ、カナダ、ロシア、オーストラリア、私が行った中でちょっと珍しいのは、フィリピン、シンガポール、台湾、そしてエジプトのカイロでしょうか。カイロは中曽根康弘さんが外務大臣の時にサダト大統領と便宜供与がありまして、日本が60億円を無償供与してカイロ・オペラハウスを開発したんです。そのこけら落としに、中村富十郎丈をお連れしたのです。

大沼 そうですか。とにかく歌舞伎はどんどん世界に出ていってほしいですね。本来だったら観に来てほしいですが、日本に来られない人が多くいるのですから。その分財界がしっかりサポートをして、資金を出すようにしてほしいですね。歌舞伎は何と言っても日本の最高の芸術ですし、最高の文化ですから。もうひとつ、武中さんにやっていっていただきたいのは、後継者の育成です。「趣味は歌舞伎、仕事も歌舞伎」というような武中二世を是非育てていただきたいですね。ここに飾ってある赤城宗徳さんの書は今から60年前、私が役人を辞めて挨拶に行った時、農林大臣室で書いてくれたものです。

武中 こちらに飾られていたんですか?

大沼 そうです。これが「風来花自笑」です。風来たりなば花自ら笑う、と読むんでしょうか。じっと辛抱していれば必ず花が咲くよ、という風に解釈しています。私の座右の銘として大切にしています。

武中 二十年程前、父親代わりのような理事長から初めてそのお話をうかがって、私も感銘を受けました。松竹に入ってからは会社に「風来花自笑」と書いて貼っていて、朝礼で時々話をしたりしております。実は新しい歌舞伎座を建てた時、上のビルのリーシングをやったんです。1万2000坪の床を埋めなければいけなくて、歌舞伎しか知らない人間には本当に途方もないことでした。最初はやはり、リーマンショックの影響があったり、東日本大震災も起こった直後でしたから7割ぐらいしか埋まらなくて、すごく悩んで理事長に相談に参りましたら「慌てるな、そのうちに来るから」とおっしゃっていただいたんです。それでとても気持ちが楽になって、本当にありがたかったです。その後、その通りに各方面からご協力やご縁をいただいて、すぐに満床になりました。これからの私にとって一番難しい問題は後継者の育成かもしれませんね。その人が持てる能力はある程度計れますが、意慾や覇気、強いては愛と言ったものは分かりません。そこで新入社員10数名と盃を片手に3時間余り、私が在籍した約40年の社史の行間に現場の声を対照して語り部会を企画しました。結構愉しくて評判も良く、近々2回目が開催されます。彼らが会社の生業である日本の伝統文化の何たるかを

娘道成寺道行

インド・パキスタンの民族衣装

学習し、将来、方向性の判断材料の一助となればすなわち、これが後継者の育成につながると信じています。

大沼　最後に、歌舞伎あるいは松竹が将来どのようにあってほしいと思っていらっしゃいますか？お聞かせください。

武中　私は今の若い子達、全世界の人達に、一度でいいです、歌舞伎を観て頂きたいと思っています。これは入社した時からずっと同じことを言い続けているんです。日本に生まれたからには英語を学ぶよりも先に歌舞伎を観て、歌舞伎と接してほしいのです。観た人の内の何割かの人でもいいから、歌舞伎の本当のファンになってもらえるような世界になってほしいと願っています。その割合が少しずつ増えていって、日本にはこんな素晴らしい伝統芸能があるんだということを、外国の言語でもきちんと伝えられるような日本人がもっともっと増えていったら、こんな嬉しいことはありませんね。

大沼　私は歌舞伎がもっと日本の文化の中心になってほしいと思いますよ。ヨーロッパ各国に行きましたが、全部オペラなんですね。老若男女問わず皆が正装してオペラを観に集い、文化の中心になっていてヨーロッパのコミュニティの中心になっているんです。歌舞伎も国民的な文化として、普遍的な存在にしていってほしいと思います。

武中　オペラと歌舞伎では歴史的な都市文化の違いがあるのではないかと思いますね。欧米では、例えばパリのオペラ座ガルニエは、ナポレオンが観に来るための劇場でした。ところが江戸の芝居小屋には将軍家はもとより旗本御家人すら来ない、本当に庶民だけの小屋でした。江戸幕府の施策によって「悪所」と言われた芝居小屋が、浅草の方に追いやられてしまったという歴史がありますが、そういう悪癖を、今の近代化された社会で何とか払拭して、劇場中心の素晴らしい街づくりをしていきたいと考えています。私は今、不動産にも携わっておりますので、築地をブロードウェイにしていければと考えているんです。松竹が入っている東劇ビル、東京劇場ですよね、戦争直後に初めて歌舞伎を上演。銀座には歌舞伎座があって新橋演舞場があって、今度東京劇場ができて、日本独自のブロードウェイを創るということが、これからの私の大きな夢なんです。

大沼　文化と建築をつないで行くことも大事ですね。パリの街造りが凄いと思うのは、凱旋門を中心に大通りを通したことです。スペインのバルセロナでは、ガウディのサグラダ・ファミリアを200年かけて完成させる、設計した本人はいなくても魂はそこにあるんだ、ということです。日本にもそういう発想があると、文化と建物が一致しますね。

文化学園服飾博物館にて

武中　私はデベロッパーの社長さん達に笑われるのですが、デベロッパーさんはビルは建てますが街は造りません。隈研吾さんとよく話をするのですが「私達はお金はそんなにないけれど街造りはしましょう」ということです。継承して行く文化と芸術と夢と未来のある希望の街を造って行かないと、日本は駄目になってしまいます。

大沼　歌舞伎を中心にしたオペラハウスができるといいですね。そうすると、着物の文化も復興すると思います。今は着物を着て出かけるところがないですよね。外国ではドレスを着て行く場所がパリのオペラ座でありミラノのスカラ座なんですが、日本にはそれがありません。でもこれだけの伝統がありますから、ファッションの学校も世界的になっているという自信があります。だからこそ、もう一度着物を着て出かける文化というのを作らないといけません。このままだと壊滅してしまいますから。

武中　そうなんですよね、でも、着物を着て歌舞伎座において頂く方、また外国人の方も多く目にするようになりましたよ。そして歌舞伎がその中心になっていけるように努力したいと思っていますし、歌舞伎という伝統の文化を後々まで継承して行く一環として、価値ある衣装の保存にも大いに力を入れて行きたいと思います。

大沼　ぜひ一緒にやって行きましょう。今日はどうも有難うございました。

武中　こちらこそ有難うございました。今後共宜しくお願い致します。